

研究成果情報

令和5年度

夏ねぎ「夏扇パワー」の襟部裂開対策及び品質向上技術

[要約] 襟部裂開が多発しやすい8～9月に収穫される作型において、は種時に紙製連結ポットに 1.5粒まきし、栽植密度を 30 本/m とすると、慣行の2粒まき(40 本/m)に比べ、襟部裂開株が減少する。上位等級割合が改善することで、売上及び所得の増加が見込まれる。

新潟県農業総合研究所園芸研究センター 育種栽培科

連絡先

TEL 0254-27-5555

FAX 0254-27-2659

[背景・ねらい]

夏ねぎで使用される「夏扇パワー」は、特に8～9月の高温期において中心葉から数えて3枚目の葉鞘襟部の裂開が多発する。それに伴い等級が下落し、売上高の減少が大きな問題となっている。そこで、夏ねぎの襟部裂開株を減少させ、売上及び所得を向上させる手法を提示する。

[内容]

- 1 は種板の穴が1列おきに1粒と2粒が交互になるようにテープで穴を塞ぎ、264穴・5cm株間の紙製連結ポットに1粒、2粒と交互には種する。得られた苗を定植すると、栽植密度は30,000本/10aとなり、慣行の75%程度となる。栽培期間中の施肥量は慣行の2粒まきと同量を施用する。
- 2 調整後の襟部裂開株(図1)発生率は慣行の2粒まきと比べ、1.5粒まきでは半分以下に抑えられる(図2)。
- 3 総出荷箱数は2粒まきがやや上回るが、1.5粒まきは2粒まきと比べ、B品箱数が減少し、A品箱数が増加する。特にA品2L箱数が増加する(図3)。
- 4 1.5粒まきにおいては、上位等級箱数の増加に伴う売上高の増加及び種苗費、流通経費、労働費の削減により、所得の増加が見込まれる(図4)。

[導入効果]

8～9月収穫の作型における上位等級割合の改善、及びそれによる生産者の所得向上

[導入対象]

本県沿岸部砂丘地帯における夏ねぎ生産者

[留意点]

- 1 本成果においては、葉鞘に1.5cm以上裂開がみられる状態を「襟部裂開」と定義した。
- 2 本成果における出荷箱数および収益は、園芸研究センター砂丘地ほ場において、令和3年～4年に実施した試験結果およびJA全農にいがた取扱市場過去10年分平均単価より算出した。

[具体的データ]



図1 襟部裂開株の外観

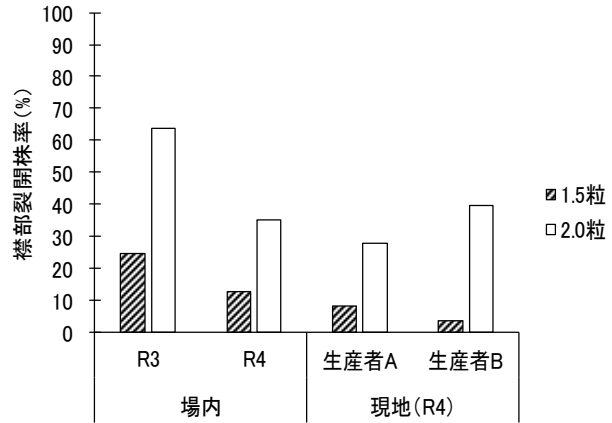


図2 は種粒数と襟部裂開株発生との関係

注 令和3年～令和4年の場内試験および令和4年の現地試験の結果から作成した。

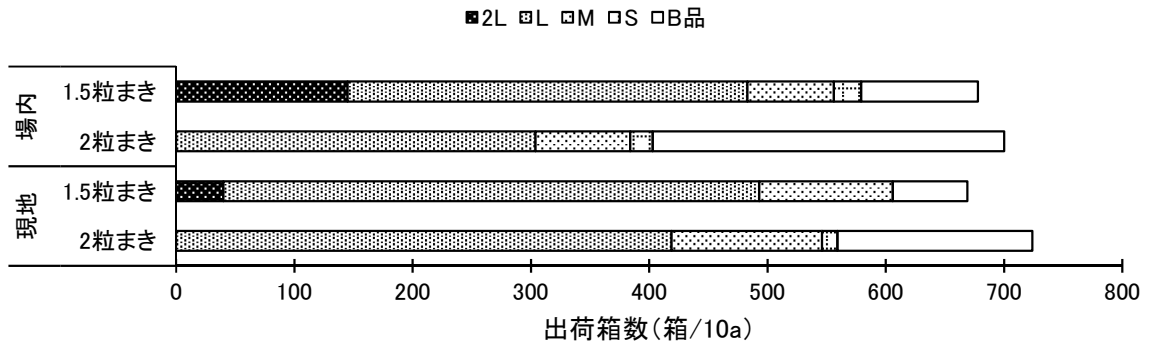


図3 は種粒数の違いが等級・規格別出荷箱数に及ぼす効果

注1 令和3年～令和4年に実施した場内試験及び令和4年に実施した現地試験(図2における生産者A)結果より作成した。

注2 新潟県青果物出荷規格基準に基づき、1箱あたりS及びMは5kg、Lは45本、2Lは30本詰めとした。

注3 1.5cm以上裂開しているものを襟部裂開株とし、すべてB品とした。

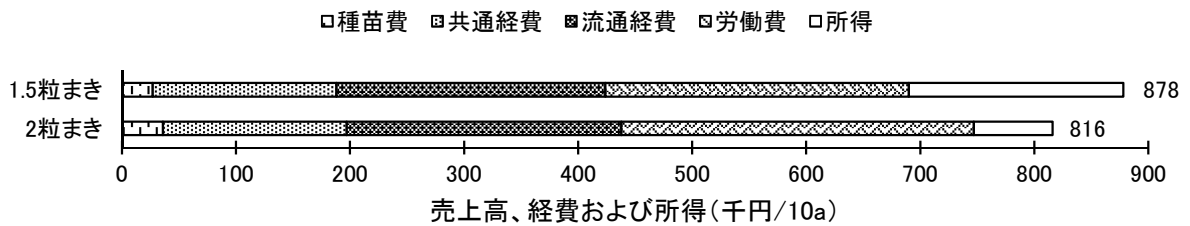


図4 は種粒数の違いが生産者所得に及ぼす効果

注1 令和3年～令和4年の場内試験および平成20年度作型別経営試算表より算出した。種苗費と肥料費は令和3年の数値とした。

注2 共通経費とは、肥料費、農薬費、諸材料費、光熱動力費、土改水利費の合計を示す。

注3 労働時間は、1.5粒を281時間、2粒を326時間、単価950円とし、調整作業以外の作業時間は同一とみなした。

注4 各棒グラフの右端の数値は売上高を示す。

[その他]

研究課題名: 複合営農を支援する野菜の高品質・安定生産技術の構築

予算区分: 県単経常

研究期間: 令和3年度～令和4年度

発表論文等: なし